

松井 浩史 氏の学位審査結果の要旨

主査：湊 直樹

副査：関本 貢嗣、蔦 幸治

赤血球粒度分布幅 (red cell distribution width: RDW) は、赤血球の均一性を示す指標であり、自動的かつ簡便に測定される。近年 RDW 高値が大腸癌や乳癌など悪性腫瘍の予後予測因子になるとの報告が散見されるが、肺癌での検討は少ない。本研究では非小細胞肺癌完全切除例における術前 RDW と予後との関連が検討された。

関西医科大学附属病院で 2006 年 1 月～2013 年 12 月に肺葉切除術以上の術式が行われた 338 例を、術前 RDW 高値群 ($\geq 50\text{fl}$) と低値群 ($< 50\text{fl}$) に分けて後方視的に検討された。単変量解析では、術前 RDW 高値群では全生存が有意に短縮していた (5 年生存率: 低値群 80% vs 高値群 40%, $p=0.0001$)。また、多変量解析では術前 RDW が高値であることが全生存の独立した予後不良因子であることが判明した (HR: 2.29, 95%CI: 1.3-4.01, $p=0.004$)。

本研究は、血算で自動的に測定される RDW が非小細胞肺癌完全切除後の独立予後不良因子となりうることを示している。肺癌の標準手術施行症例の予後予測について新たな知見を提供するものと考えられ、学位に値するものと考えられた。